

日本語版の編集にあたって

本書に収録されているインタヴューには、オリヴァー・サックスの著作になじみのない人にとっては分かりづらい部分もある。そこで、翻訳書では、用語や人物についての解説だけでなく、サックスの実際の著作も取り入れて、なじみのない読者でも内容を理解できるよう随所に訳注を追加した。訳注は各章の最後に記載されているので、参照しながら読み進めていただきたい。また、本文、および訳注におけるオリヴァー・サックスの著作の引用は、以下に記した既存の翻訳書を基にしている。冗長になるのを避けるため、本文中の各引用において、引用元は書名のみを表記に留めた。オリヴァー・サックスの翻訳書の中には、初版が出版された後に文庫版が出版されたものもある。その場合は、入手しやすい文庫版を掲載した。

- オリヴァー・サックス著、春日井晶子／大庭紀雄訳（2000）『サックス博士の片頭痛大全』早川書房（ハヤカワ文庫、NF243） [Oliver Sacks (1970) *Migraine: understanding a common disorder*. University of California Press]
- オリヴァー・サックス著、春日井晶子訳（2015）『レナードの朝 新版』早川書房（ハヤカワ文庫、NF428） [Oliver Sacks (1973) *Awakenings*. HarperPerennial]
- オリヴァー・サックス著、金沢泰子訳（1994）『左足をとりもたずまへ』晶文社 [Oliver Sacks (1984) *A leg to stand on*. Summit Books]
- オリヴァー・サックス著、高見幸郎／金沢泰子訳（2009）『妻を帽子とまらがえた男』早川書房（ハヤカワ文庫、NF353） [Oliver Sacks (1985) *The man who mistook his wife for a hat and other clinical tales*. Summit Books]
- オリヴァー・サックス著、佐野正信訳（1999）『手話の世界へ』晶文社 [Oliver Sacks (1989) *Seeing voices: a journey into the world of the deaf*. University of California Press]
- オリヴァー・サックス著、春日井晶子訳（2015）『色のなま島へ：脳神経科医のミクロネシア探訪記』早川書房（ハヤカワ文庫、NF426） [Oliver Sacks (1997) *The Island of the Colorblind*. Vintage]
- オリヴァー・サックス著、吉田利子訳（2001）『火星の人類学者：脳神経科医と7人の奇妙な患者』早川書房（ハヤカワ文庫、NF251） [Oliver Sacks (1995) *An anthropologist on Mars: seven paradoxical tales*. Vintage Books]
- オリヴァー・サックス著、斉藤隆央訳（2016）『タングステンおじさん：化学と過した私の少年時代』早川書房（ハヤカワ文庫、NF472） [Oliver Sacks (2001) *Uncle Tungsten: Memories of a Chemical Boyhood*. Vintage]

- オリヴァー・サックス著、林雅代訳（2004）『オアハカ日誌…メキシコに広がるシダの楽園』早川書房 [Oliver Sacks (2002) *Oaxaca Journal*, Vintage]
- オリヴァー・サックス著、大田直子訳（2014）『音楽嗜好症（ミュージコフィリア）…脳神経科医と音楽に憑かれた人々』早川書房（ハヤカワ文庫 NF414） [Oliver Sacks (2007) *Musophilia: tales of music and the brain*, Knopf]
- オリヴァー・サックス著、大田直子訳（2011）『心の視力…脳神経科医と失われた知覚の世界』早川書房 [Oliver Sacks (2010) *The mind's eye*, Vintage]
- オリヴァー・サックス著、大田直子訳（2018）『幻覚の脳科学…見てしまっ人びと』早川書房（ハヤカワ文庫、NF519） [Oliver Sacks (2012) *Hallucinations*, Knopf]
- オリヴァー・サックス著、大田直子訳（2015）『道程…オリヴァー・サックス自伝』早川書房 [Oliver Sacks (2015) *On The Move: A Life*, Vintage]
- オリヴァー・サックス著、大田直子訳（2016）『サックス先生、最後の言葉』早川書房 [Oliver Sacks (2015) *Gratitude*, Knopf]
- オリヴァー・サックス著、大田直子訳（2018）『意識の川をゆく…脳神経科医が探る「心」の起源』早川書房 [Oliver Sacks (2017) *The River of Consciousness*, Knopf]

目次

日本語版の編集にあたって	iii
編集者の覚え書き	1
神経学者オリヴァー・サックス	7
テリー・グロスによるインタビュー	
「フレッシュ・エア」	
1987年10月1日	
火星の人類学者	23
チャーリー・ローズによるインタビュー	
「チャーリー・ローズ」	
1995年2月	

スタッズ、サックス、そして左利きの技能 59

スタッズ・ターケルによるインタヴュー

『ザ・スタッズ・ターケル・プログラム』

1995年

オリヴァー・サックスの洞察への道としての共感 107

リサ・バレルによるインタヴュー

『ハーヴァード・ビジネス・レビュー』

2010年11月

老いの喜び 117

トム・アシユブルックによるインタヴュー

『オン・ポイント』

2013年7月18日

サックス博士の回想 ……………

133

ロバート・クルルウィッチによるインタビュー

ブルックリン・アカデミー・オヴ・ミュージックでのライブ録音

2015年5月5日

インタビューアについて ……………

161

訳者あとがき ……………

163

凡例…

本文において、訳者による補足は大括弧（一）内に記載した。

原文中の括弧（二）は、亀甲括弧（三）内に記載した。

訳注は、各インタビューの最後にまとめて記載した。

編集者の覚え書き

オリヴァー・サックス博士は、記録を取るための話し相手としては、病的に恥ずかしがり屋だったと本書のインタヴューアの一人は述べている。偉大な神経科学者であり、医師であり、ベストセラー作家であったにもかかわらず、公式なインタヴューが比較的少ない理由は、このことにあるのかもしれない。

サックスの長い経歴と多くの著作を考えると、これはかなり驚くべきことである。一九七〇年から二〇一五年にかけて、彼は、ロビン・ウィリアムズが主役を演じて映画化もされた『レナードの朝』^{訳注1}、大ヒット作の『妻を帽子とまぢがえた男』、そして、二〇一五年八月に亡くなるちょうど六カ月前に出版された自伝である『道程：オリヴァー・サックス自伝』などを含む、十四冊の本を書いた。また、『ニューヨーカー』、『ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』、『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス』にも定期的に寄稿していた。

サックスが最終的にインタヴューにに応じてくれたのは、ほとんどの場合、自分の仕事を知って

もらいたいという義務感からだだったのであろうと思われる。ここに集められたためつたにないインタヴューは、本が出版されるタイミングで行われたり、PBSテレビのチャリー・ローズの番組や、ナショナル・パブリック・ラジオの「フレッシュ・エア」プログラム、そして、人気ラジオパーソナリティーでもあったスタッズ・ターケルの番組で実施されたりした。それらは主に音声で聞くことができるが、いくつかについては、メルヴィルハウスから初めて文字起こしされて出版された。

文字に起こすにあたっては、サクスの話し方の特徴を残すように努力した。それは、例えば、吃音があったり、コメントする時には、断定せずに「ある種の」というような文言で修飾したりする魅力的な傾向である。読者はまた、インタヴューの中には、他のインタヴューよりも頻繁に途中で割り込む人もいれば（「――」で示されている）、明らかにゆったりとして、熟考的な一時停止を楽しんでいるような人もいることに気づくだろう（省略記号「…」で示されている）。本書の最初に掲載されている「フレッシュ・エア」のテリー・グロスとのインタヴューは、複数回にわたるインタヴューの最初のものであり、「神経学的な状態のみならず、心の状態も記述する」という、医師である彼自身が行ったユニークな文学的アプローチが頻繁に紹介される。それに続く、チャリー・ローズとスタッズ・ターケルとのインタヴューは、『火星の人類学者』

が出版された後に、各インタヴューのテーマに対して、明確に異なるアプローチが取られた。ローズとのインタヴューは、明らかに個人的なものであり、哲学的なものでさえある。サックスは、家族やロビン・ウィリアムズとの友情、私たちの一部である「想像を絶するほど複雑で美しい」脳への賞賛、そして彼自身が最終的には存在を信じることができない神への信仰に対する憧れを話す。一方、ターケルとのインタヴューは、本そのものに密着したものであるが、そうすることで、ターケルが「詩人の魂と素晴らしい小説家としての執筆の才能を持っている、驚異の神経科医」として紹介する、著者の内面が明らかになっている。

残りのインタヴューは、二〇〇五年にサックスが目のがんと診断された後、それぞれ「ハーヴァード・ビジネス・レビュー」の編集者であるリサ・バレルと、NPR（ナショナル・パブリック・ラジオ）の「オン・ポイント」のキャスターであるトム・アシュブルックと、そして、NPRの「ラジオ・ラボ」のホストであるロバート・クルルウィッチと行われた。彼らはより直接的に死について話をし、サックスと患者との関係がどのように変化したかを探る。その頃には、彼もまた患者だった。アシュブルックによるインタヴューは、サックスの八十歳の誕生日のすぐ後に行われた。その時サックスは、老後の満足感について「ニューヨーク・タイムズ」に論説を書くように促されていた（「私は精力的に書くことも、泳ぐこともできます……水泳は人が人生の

最初の百年間にわたってできる数少ない活動の一つだと思えます」。訳注³

最後のインタヴューは、「ラジオ・ラボ」のホストであるロバート・クルルウィッチがサククスを訪ね、彼の家で会話を録音した後、二〇一五年五月五日に、ブルックリン・アカデミー・オヴ・ミュージックで、聴衆の前でライブ放送された。これは、本書に収録されている一連のインタヴューの中で群を抜いて最も心に訴えるものである。サククスは、これが最後のインタヴューになることに鋭敏に気づいていた。訳注⁴最新の診断について、サククスは次のように語った。「私に手紙を書き、慰めてくれた人も、一人か二人はいました。手紙には、「でも、私たちは皆死ぬのです」と書かれていました。何言ってるんだ! 「私たちの誰もが死ぬ」ということではなく、「余命四カ月」ということなのに」。二人の数十年にわたる長い友情を考えると、この言葉もまた胸に刺さる。クルルウィッチとサククスの率直で驚くほど親密な対話の中に、そのような友情が呼び起こされる。

ここに集められた対話は、ほぼ三十年の期間にわたっており、さまざまな話題を含んでいるが、それらは、暖かさ、共感、そして独創的な好奇心という精神によって統一されている。これが、サククスを有名にし、愛されるべき人物にしたのである。

訳注1 原題は *Awakenings* (目覚め) である。

訳注2 このインタヴュー集が2016年に出版された後、2019年に新たに「*Everything In Its Place: First Loves and Last Tales*」という本が出版された。また、ローレンス・ウェンチュラー (Lawrence Weschler) が著したオリヴァー・サックスの回顧録である「*And How Are You, Dr. Sacks?: A Biographical Memoir of Oliver Sacks*」も出版されている。

訳注3 この論説は、オリヴァー・サックスの誕生日(7月9日)の直前に書かれ、2013年7月6日にニューヨーク・タイムズに掲載された。「オリヴァー・サックス最後の言葉」に収録されている。

訳注4 オリヴァー・サックスは、このインタヴューが行われてから約4カ月後の2015年8月30日に82歳で亡くなった。